

「傘がない」



—真下魚名—

A-side

パン屋さんで4枚切りのパンを買って、店の外に出た。

あ、傘が無い。

傘立てに置くときに、同じような黒い傘があったので、もしやと思って離して立てたのだけど、間違えて持って帰ってしまったらしい。

雨は降り始めたばかりで、やみそうにない。

その一時間ばかり前、雨が降り出す前にとまって、髪を切りに行った。いつものように雑談をしながら、ドライヤーをかけてもらっていた時だ。「雨、降り出しましたね。」

ああ、こうなったらもう、髪乾かさなくていいです、と言おうかと思ったが、あまりにも自虐的なのでそれは思いとどまった。

代金を支払って、明るく送り出してもらったけれど傘をもって来ていなかった。

仕方が無いので、そのまま雨に打たれて帰ることにした。不幸中の幸いな事に、ずぶぬれになるほどの本降りではなかったので、家に帰ったあともう一度髪を乾かして、上着を着替えて今度はちゃんと傘をもって出かけて来たのだ。

残されていたのは、使い込まれて水もはじきそうにない、いささか草臥れたような傘だった。

これをもって帰ったら、もし間違いに気づいて返しに来たときに、さして行く傘が無くてその人が困るだろう。

でも、もう一度濡れて帰る気にはならなかった。

「僕だけど。今パン屋さんの前。傘、間違えられちゃって。悪いけど迎えに来てくれる？」

そのパン屋の前で雨宿りをして、行き交う人たちを見ていた。

雨の中を、音楽教室へ走って行く子供たち。休日にスーツを着て、ケイタイで話しながら歩く若いサラリーマン。軽い春のコートを着てお出かけの様子の娘さん。多分買い出しに出かける途中の喫茶店のマスター。パンを買いにやってくるおじいさん。大きなスポーツバッグを背負って、学校に急ぐ高校生。

「よろしかったら、傘お貸ししましょうか。」

店員さんが声を掛けてくれた。

「迎えに来てもらうので、大丈夫です。誰かが、間違えてもって帰られたみたいで、、、。」

「そうなんですか。」

ああ、そういえば、若い頃は雨の日が好きだったなあ。

「お待たせ。」

「ごめんね。」

「その傘、骨折れてる？」

「うん、だいぶ曲がってる。でも、まだ大丈夫だよ。」

持ち去られた傘は、この傘が駄目になりそうだから新しく買って、まだ何程も使っていない。だから、新しい持ち主の手で、当分の間はその人が濡れないように頑張ってくれるだろう。

子供の頃、母が働いていたので、雨が降っても誰も迎えに来てくれる人が居なかった。でも、今はこうして傘をもって来てくれる人が居る。

僕には、“雨降りの日は特別に幸せな日”、なんだ。

B-side

チャイムの音がした。

「でーは。本日の講義はここまでです。」

4月から比べると、だいぶスカスカになったなこの大教室。こんな講義、興味が無ければなんの面白みも無いからな。

昼、どうしようかな。学食にするか、生協でサンドイッチ買って、部室に行くか。午後もあるから、学校の外でって言うのはいまいちな。

よいしょっと。辞書の重みが。

語学のある日は、やたら鞆重いんだよ。ま、他にもウォークマンとか、カメラとかレンズとか入ってるからなんだけど。

背骨曲がってるかも、、、曲がるか、普通。

あ、この匂い。雨の匂いだ。。。傘もってねえ。

ああ、やっぱりか。軒先から一步前は、雨の国だ。6月だもんなあ。。。。
地下の学食に行くしかないかなあ。でも、午後の授業って新町だ。

結局濡れるのか。

雨に濡れんのはどおってことないんだけど、其の格好で教室入るのがね。辞書の代わりに、折りたたみ、もってくるんだった。

ビニール傘買うかなあ。どっちかって言うと、傘買うくらいなら、フィルム買いたいしなあ。

「何悩んでるの。」

え。

「あれ、何？こんなところで。」

「上の教室。階段降りて来たらコシナくんがなんか悩んでるっていうか、傘忘れたの？この天気で。」

くっ。

「オレが傘もってくると、雨降らないの。だから、傘持ち歩くの無駄なんだよ。」

「なに、その法則。降らなかつたら降らなかつたでいいじゃない。」

その通りですけどね。

「次、どこ。私の傘入ってく？」

「新町だけど、、遠慮しとく。傘小さいから、綾野さんが濡れるでしょ。」

でも、全然やみそうにないなあ。

「コシナくんで、人に構われるの苦手？一人でいることが多いでしょ。」

頭の中で、ざーって言う雨の音がした。

「人嫌いじゃないんだけど、気疲れするかな。テレビとかみないからついていけないとか。やりたいこと多いし、趣味がちょっとずれてるから人に話題合わせるのが結構ね。」

「そうなんだ、ふーん。」

変わったやつですいません。

綾野さんみたいに、明るくて社交的な人間じゃないんだよ。

「雨は嫌いじゃないし、濡れるのがいやな訳でもないし。綾野さんの傘に入れてもらうのが嫌って訳でもない。でも、抵抗感はある。そんな世話になっていいのかなって。だから、遠慮しとくよ。」

またやっちゃった、だめだなオレ。

誰かに好意を見せられても、そこから逃げちゃうんだよ。なんでこんなのに、なったんだろうな。

「とにかく、地下の学食に行くよ。ありがとね。」

「私もだよ。」

はい？

「私も人に合わせるのつらい方。」

何言ってんの、キミのどこが。

「高校の時とか、もうそばに寄って来ないで、って感じだった。でも、大学受かって、一生こんなだったらだめだって思って、田舎から出て来て、昔の私のこと誰も知らないから、変わろうと思った。」

、、、そうだったんだ。

「だから、コシナくんってなんとなくそんな人なんだろうなって、すぐに分かって、さっきここで黄昏れてるの見たとき、チャンスって思ったんだ。

だから、いま勢いだけっていうか、勇気総動員してる。」

偉いなあ。その十分の一でも見習いたい。っていうか、見習えよオレ！

「あー、じゃあ、僕が傘もつってことで、新町までお願いしていい？」

「うん。」

「ついでに、、、ランチも付き合って。」

「うん、うん。」

この日から、僕にとって”雨降りの日は特別に幸せな日”になった。

写真集「空と月と、夜桜デート」

写真集「空と木と、ときどきの梅暦」

写真集「空と窓と、京都の路地は奥に深いです ni」

写真集「空と窓と、京都の路地は奥に深いです」

写真集「空と木とたまに月」

写真集「からくれないに」

「黄金の麦畑」

1.Largo

第1回 ～ 第41回

「黄昏の王国」

イーリアス編

アリシア編

— 僕カノシリーズ —

「僕が彼女に殺された理由（わけ）」

「僕と彼女の選択の事由（わけ）」

「僕と彼女はそれしか答えを見つけられなかった。」

「僕と彼女はそれでも答えを探し続ける」

「僕と彼女と複雑な関係者たち」

「僕と彼女と単純な関係式」

「僕と彼女と校庭で」

「僕と彼女と校庭で 夏」

「僕と彼女の Aria」

「僕と彼女のインベンション」（次回）

— その他 —

夕暮れの赤ちょうちん

いもうと

サマータイム・ブルーズ

危険なドライビングマジック

デフラグメント

インフルエンス あのころの僕たち

花舞い、名残り雪

詞画集「ただ憧憬だけを」

写真集「空と雲と、ときどき月」

写真集「夢みる桜」